

秦人の都城遺跡

角道 亮介（駒澤大学）

はじめに

本論の目的は、中国における都城の変遷・発展の歴史の中に、秦の都城遺跡をどのように位置づけるかにある。藤本強は、経済的な要因から出現する「都市」と、政治的・軍事的な背景に起因する「都城」とを明確に区別したうえで、中国における拠点集落を「都城」と呼んだ（藤本 2007）が、特定の集落遺跡が政治的・軍事的役割を持つ都城であったのか否かを考古資料から判断する指標の一つに、城壁の有無があげられる。

かつて宮崎市定は古代中国の都城の変遷について、君主の拠点を護るために城（内城）がまず形成され、やがて城の周囲に分布した民居をも取り囲むかたちで郭（外城）が築かれるというモデルを提唱した（宮崎 1933）。しかしながら、近年の発掘調査によって明らかになりつつある先秦時代の都城の様相は複雑であり、中国における都城の変遷が単線的な発展モデルでは説明できないことを示している。

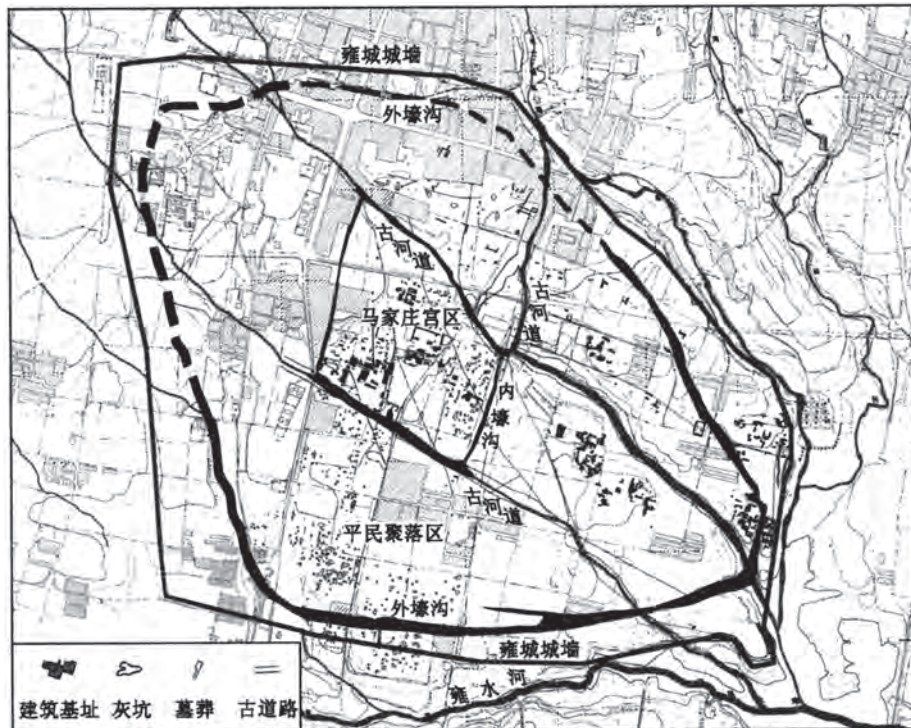
許宏は「早期王朝時代」にあたる二里頭期～西周期では、各王朝の中心地である二里頭遺跡・殷墟遺跡・周原遺跡で大規模な外郭が検出されない点に注目し、都城発展史における「大都無城」モデルを提唱した（許宏 2016・2017）。筆者も周原遺跡の都市構造を分析した際に、拠点の外部と内部を区画する城壁を作らず、集団の統合に伴って徐々に拡大する都市の在りかたこそが、王都にとって重要であったと考察した（角道 2018）。

本稿では、東周時代の秦人の都城遺跡である雍城遺跡と咸陽城遺跡を取り上げ、その都城設計を主に城壁の観点から検討したい。

1. 雍城遺跡の変遷

雍城遺跡は東周時代における秦人の中心的な都城遺跡である。現在の陝西省鳳翔県鳳城の南に位置し、馬家荘宮殿区を中心に不規則な方形の城壁を有する。城外南西部には秦公一号墓を中心とする大型貴族墓地が分布する（第1図）。

当遺跡の調査に長年にわたって携わった田亜岐によれば、拠点集落としての雍城遺跡は三つの時期に分けることが可能という（田亜岐 2015、陝西省考古研究院秦漢考古研究室 2018）。第一期には、雍城遺跡東南部に位置する瓦窯頭村の一帯で大型建築遺構が検出されており、当地が雍城の中心部分であったと想定されている。瓦窯頭村付近は雍水河・紙坊河・塔寺河・鳳凰泉河が合流する地点であり、これらの河川から水を引いて水濠を作り



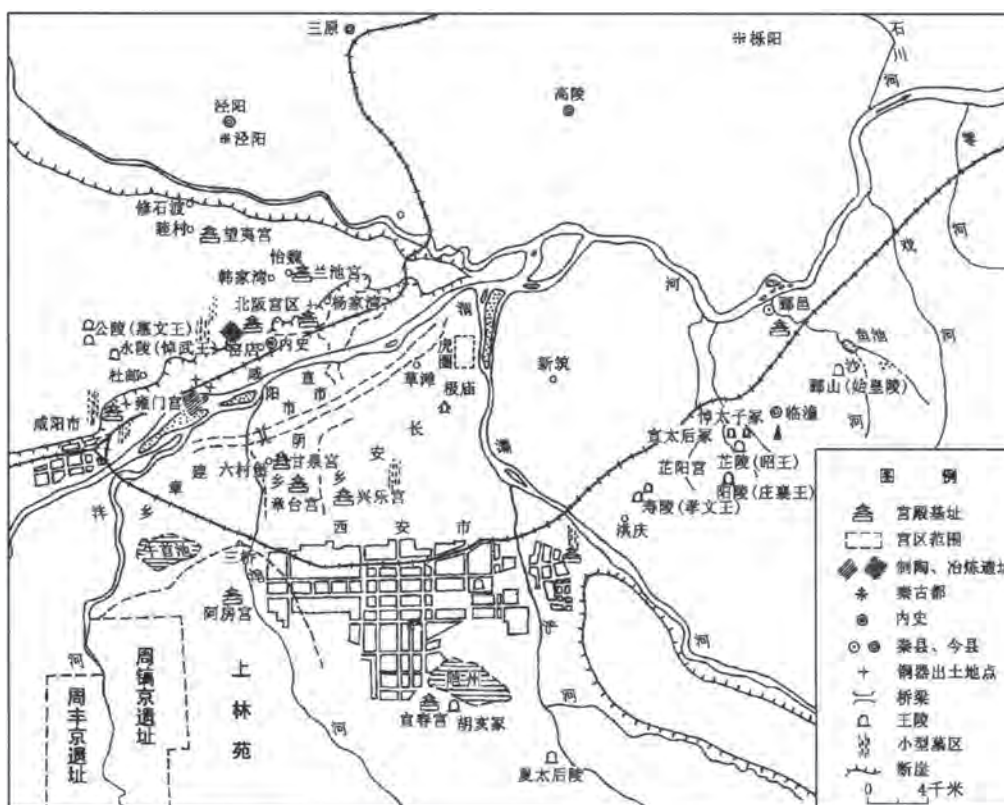
第1図 雍城遺跡の環濠と城壁

拠点の防備とした「城塹河瀕」が第一期の特徴であるという。田は対応する秦公として、徳公・宣公・成公の時期（前 677 年～前 660 年）を推定する。

第二期には城の中心が馬家荘の大型建築遺構へと移り、その周囲からいくつかの工房遺跡が発掘されるようになる。馬家荘宮殿区における宗廟と、土器製作工房・青銅器製作工房などが雍城内に面的に分布する点で、都城内の機能分化が明確化する時期だともいえる。遺跡全体を囲う郭はなお作られなかったものの、馬家荘宮殿区の周囲には人工的な濠が作られ、さらにその外側に掘られた外濠とともに二重の環濠を形成した。田はこの二重環濠を「城郭」と呼び、当期を「城郭結構」期と呼称している。雍城遺跡の主要時期であり、対応する秦公として穆公～恵公の時期（前 659 年～前 491 年）を推定する。

第三期は雍城遺跡の最終段階であり、悼公から咸陽遷都までの時期、前 490 年～前 350 年という年代が当てられる。第三期には郭が作られ、宮殿区の中心は城内北部の姚家崗―鉄豊村―高王寺村一帯に移る。当該期の外郭の出現によって雍城は強固な防御機能を備えることとなり、田は雍城遺跡の拡大がこの時期によりやく完了したことを指摘する。

田らによる雍城の段階的変遷の指摘は非常に重要であるが、各時期の絶対年代はおおよそ文献との対比から導かれたものであり、考古学的な時期区分として各秦公と一対一に対応するかという点では疑問点が残る。例えば、第三期の開始年代を前 490 年とするのは、『史記』秦本紀に「悼公二年、雍に城す」とある記載を「雍に城壁を作る」と解釈して、



第2図 咸陽城遺跡の遺構分布

外城壁設置の時期が下る事実と突き合せた結果であり、遺構そのものに春秋後期の年代が与えられるわけではない。雍城西郊の血池遺跡で漢代の遺物・遺構が多く検出されていることを考えれば雍城遺跡の継続時期が咸陽城遷都後まで下る可能性は高く、第三期の開始年代が戦国時代以降に相当する余地は大いにある。

2. 咸陽城の遺構分布

文献の記載によれば、紀元前 350 年に孝公が栎陽から遷都して以降、秦の都城は咸陽に置かれたことになる。咸陽城遺跡は現在の陝西省咸陽市の東郊に位置し、大型の宮殿遺跡などが部分的に発掘されている。また、大型建築遺構が集中する宮殿区の西側には鉄器・青銅器鑄造遺跡や土器製作工房遺跡などの手工業区画が位置する（第2図）。城壁に関して言えば、大規模建築遺構が集中する範囲で東西約 900m、南北約 600 m の囲壁が確認されているが（陳国英 1988）、明確な外郭の存在は明らかになっていない。2006 年から 2014 年にかけて行われた大規模なボーリング調査でも城内と城外を区画する標識は検出されず、咸陽城の北に広がる咸陽原という自然地形こそが咸陽城の北の境界であった可能性が指摘されている（陝西省考古研究院秦漢考古研究室 2018）。

咸陽城で外郭が未発見である点は秦の都を考えるうえで示唆的である。秦人が力を蓄え

た春秋時代の都城である雍城遺跡においても核心的時期にあたる第二期には城壁（外郭）は存在しなかった。やや俯瞰的に見れば、西周期から東周期にかけての關中平原では、周原遺跡・雍城遺跡・咸陽城遺跡がいずれも外郭を持たない都城だったといえる。そこには、何らかの合理的な理由が潜んでいるはずである。

おわりに

雍城遺跡内の馬家莊遺跡において宗廟が機能していたと考えられる雍城第二期には、都城には外郭が伴わなかった。それは、政治的な中心が咸陽城に遷って以降も同様であった。東周時代の秦人の都城遺跡では基本的に外郭は作られず、それは二里頭遺跡以来の「大都無城」的状况が秦の中心地においても継続したことの表れでもあった。

国家形成期において集団を統合し社会が複雑化する中で、その政治的中心地たる都城では拠点の広がり限定する外郭は必須の要素ではなかった。むしろ往々にして城壁の不存在こそが、拡大する都城の象徴であったと考える。

引用参考文献

（日本語）

角道亮介 2018「周原遺跡における西周都城の都市構造」『中国考古学』第 18 号

藤本強 2007『都市と都城』（市民の考古学 2）、同成社

宮崎市定 1933「中国城郭の起源異説」『歴史と地理』第 32 巻第 3 号

（中国語）

陳国英 1988「秦都咸陽考古工作三十年」『考古与文物』1988 年第 5・6 期

陝西省考古研究院秦漢考古研究室 2018「2008 ～ 2017 年陝西秦漢考古綜述」『考古与文物』2018 年第 5 期

田亜岐 2015「秦都雍城考古録」『大衆考古』2015 年第 4 期

王学理 1999『咸陽帝都記』三秦出版社

許宏 2016『大都無城 中国古都の動態解説』生活・読書・新知三聯書店

許宏 2017『先秦城邑考古』金城出版社

挿図出典目録

第 1 図 田亜岐 2015 より転載

第 2 図 王学理 1999 より転載

秦人都城遗址

角道 亮介（日本驹泽大学）

绪论

本文旨在探讨中国都城变迁、发展的历史中，对于秦都城遗址该如何定位。藤本强将由于经济因素而形成的“都市”、与在政治、军事背景下形成的“都城”明确区分开来，并将中国的据点聚落称为“都城”（藤本 2007），但从考古资料来说，判断特定的聚落遗址是否为具有政治、军事功能的都城的一个标准则是是否建有城墙。

关于古代中国都城的变迁，宫崎市定曾提出一个模式：为了保护君主的据点首先形成城（内城），随后为了将分布于城周围的居民包围其中建造了郭（外城）（宫崎 1933）。然而随着近年的发掘调查逐渐发现，先秦时代都城的情况十分复杂，中国都城的变迁并不能用单线的发展模式来说明。

许宏注意到，在处于“早期王朝时代”的二里头至西周时期，各时期的中心即二里头遗址、殷墟遗址、周原遗址中并未发现大规模的外郭，从而提出了都城发展史的“大都无城”模式（许宏 2016, 2017）。在对周原遗址的城市构造进行分析时笔者也发现，这种不建造用作区分据点内外部的城墙，城市随着集团的统合而逐渐扩大的状态，对于王都而言正是十分重要的特点（角道 2018）。

本文着眼于东周时代的秦人都城遗址——雍城遗址与咸阳城遗址，主要从城墙的视点来探讨其都城的设计。

（1）雍城遗址的变迁

雍城遗址是东周时代秦人的中心都城遗址。位于现在的陕西省凤翔县县城南侧，以马家庄宫殿区为中心建造有不规则的方形城墙，城外的西南部分布有以秦公一号墓为中心的大型贵族墓地（图 1）。

长年参与雍城遗址调查的田亚岐认为作为据点聚落的雍城遗址可能分为三个时期（田亚岐 2015；陕西省考古研究院秦汉考古研究室 2018）。在第一期，雍城遗址东南部的瓦窑头村一带发现有大型建筑遗存，推测这里应为雍城的中心区域。瓦窑头村附近是雍水河、纸坊河、塔寺河、凤凰泉河合流之地，在此引河川之水修水濠，以之作为城防设施，这种“城堑河濒”的特征为第一期所有。田亚岐推定其对应秦德公、宣公、成公这一时期（前 677 年～前 660 年）。

第二期城市的中心移至马家庄的大型建筑遗存，在其周边发掘出若干作坊遗址。由于在马家庄宫殿区内宗庙与陶器作坊、青铜器作坊等成片分布，可以认为这一时期为都城内机能

分化明确化的时期。虽然包围整个遗址的郭尚未建造,但在马家庄宫殿区周围挖有人工壕沟,同时在其外侧开挖外壕形成二重环壕。田亚岐称此二重环壕为“城郭”,这一时期为“城郭结构”期,并推测其为雍城遗址的主要使用时期,对应秦穆公至秦惠公时期(前 659 年~前 491 年)。

第三期是雍城遗址的最终阶段,为秦悼公至迁都咸阳前的时期,年代为公元前 490 年至公元前 350 年。第三期建有郭,宫殿区中心向城内北部的姚家岗-铁丰村-高王寺村一带转移。这一时期由于外郭的出现,雍城具备了强固的防御机能。田亚岐指出雍城遗址的扩张在这一时期逐渐完成。

虽然田亚岐等人对雍城阶段性变迁的研究非常重要,但其各个时期的绝对年代是从文献对比中得出,在考古学年代区分上是否与秦代各君主一一对应?这一点还存在疑问。例如,将第三期的开始年代定为公元前 490 年,是把《史记·秦本纪》中“悼公二年,城雍”的记载解释为“在雍建造城墙”,从而与外城墙建造时期较为晚近的事实相对照,而不是说可以将此遗址定在春秋晚期。考虑到雍城西郊的血池遗址发现了许多汉代的遗物和遗迹,雍城遗址极有可能延用到迁都咸阳城后的时期,而且第三期的开始年代也有讨论的余地,或许为战国时期或更晚。

(2) 咸阳城大型建筑遗址的分布

根据文献记载,公元前 350 年孝公从栎阳迁都至咸阳后,秦便一直定都于此。咸阳城遗址位于今陕西省咸阳市东郊,大型宫殿遗址等已被部分发掘。另外,大型建筑遗址集中的宫殿区西侧,有铁器、青铜器铸造遗址和陶器制作工坊遗址等手工业区划(图 2)。就城墙而言,在大型建筑遗址集中的区域内,虽已确认有东西约 900m,南北约 600m 的围墙(陈国英 1988),但还不确定是否真的存在外郭城。2006 年至 2014 年进行的大规模钻探调查中也没有发现划分城内和城外的标识,咸阳城北面广阔的咸阳原自然地形可能才是咸阳城北边的边界(陕西省考古研究院秦汉考古研究室 2018)。

咸阳城未发现外郭,这一点对研究秦的都城极具启发性。在秦人积蓄力量的春秋时期,在其都城雍城遗址中最为核心的第二期,城墙(外郭)也并不存在。从更广泛的角度来看,可以说从西周时期到东周时期的关中平原内,周原遗址、雍城遗址、咸阳城遗址都是没有外郭的都城。这其中一定潜藏着某种合理的理由。

结语

在雍城遗址内的马家庄遗址被作为宗庙实际使用着的雍城第二期,其都城并没有外郭。政治中心迁移到咸阳城后也是如此。在东周时期,秦人的都城遗址也基本上不建造外郭,这表明自二里头遗址以来的“大都无城”的情况在秦的中心地带继续存在着。

在国家形成时期,随着群体的整合和社会的复杂化,作为政治中心的都城不一定需要限制其

扩张的外郭。倒不如说，正是城墙的不存在，象征着都城的无限扩大。

引用参考文献

（日文）

角道亮介：《周原遺跡における西周都城の都市構造》，《中国考古学》第18号，2018年。

藤本强：《都市と都城》（市民の考古学2），同成社，2007年。

宫崎市定：《中国城郭の起源異説》，《歴史と地理》，第32卷第3号，1933年。

（中文）

陈国英：《秦都咸阳考古工作三十年》，《考古与文物》，1988年第5.6期。

陕西省考古研究院秦汉考古研究室：《2008～2017年陕西秦汉考古综述》，《考古与文物》，2018年第5期。

田亚岐：《秦都雍城考古录》，《大众考古》，2015年第4期。

王学理：《咸阳帝都记》，三秦出版社，1999年。

许宏：《大都无城 中国古都的动态解读》，生活·读书·新知三联书店，2016年。

许宏：《先秦城邑考古》，金城出版社，2017年。

插图出典目录

图1 雍城遗址的环濠和城墙 转载自田亚岐 2015

图2 咸阳城遗址的遗存分布 转载自王学理 1999

（杨海东、胡九六译，吕梦校）

The Capital City Sites of Qin People

KAKUDO Ryosuke

(Komazawa University, Japan)

When considering the historical formation of political power in early China, the transition of city walls, which indicates the existence of a political and military center, is one important archaeological clue. However, previous studies have emphasized the single-track transition of capital cities from the Neolithic period to the Han dynasty, while those in the early state period (the three dynasties) without city walls have rarely been evaluated. Therefore, this study attempts to positively assess capital cities that did not have walls in the early state period, targeting the capital ruins of the Qin people at the Yongcheng and Xianyang sites.

Recent excavations have revealed that the Yongcheng site, the capital city of the Qin people in the first half of the Eastern Zhou era, did not have city walls during its second period, which is its main period. Furthermore, no walls have been found from the Xianyang site, the capital city of the latter half of the Eastern Zhou era. In other words, like the early dynasty capital, Qin people did not build city walls in their capitals.

During the reorganization of several clans and the shaping of political power, the existence of an outer wall limiting a capital's expansion was inconvenient. On the contrary, it can be said that the absence of city walls was a symbol of a developing capital.